

ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立

釋 氏 真 澄

はじめに

浄土真宗本願寺派の海外伝道は北米（アメリカ本土）、ハワイ、カナダ、南米の四開教区が中心であるが、自身が6年間カナダ開教区にて開教使として駐在した経験のもと、英語による教学の再構築は大きな課題であると考え、英語礼拝聖典は毎週の礼拝の場で、拝読文や歌を繰り返すことを通し、開教使の法話以上に強い伝道力を持つこともあるが、本稿では特に、今までスポットがあてられることのなかった、欧州系僧侶ハント編纂の初めての英語礼拝聖典、*Vade Mecum* の成立背景と、そこに見られる儀礼の教学的内容について考察を試みる。

1. ハントとハワイ教団英語伝道部

ハワイ開教区（Honpa Hongwanji Mission of Hawaii）の創設は1889年であり、二代目総長であった今村恵猛¹⁾は英語伝道を大きく推し進め、1918年には英語伝道部を教団に設立した。今村は1924年8月11日にホノルル別院で、ハワイにおいて初めての得度式をイギリス人アーネスト・真覚・ハント²⁾（以下ハントと略）と、妻ドロシーにおこない、1927年にはハワイ教団英語伝道部の主任に任命しホノルルで英語伝道をすすめさせた。ハントの英語伝道の功績として、書籍の出版や、国際仏教協会ハワイ支部の設立³⁾によって60名の白人を仏教徒に改宗させたことや、日系2世の子供や青年層への英語伝道、また病院や刑務所への積極的な伝道などが挙げられる。しかし、ハント自身が真宗に信仰を置かず上座部の倫理的教義を中心とする英語伝道をすすめていた上、教団より高給を受けていたことで他開教使より不満の声も高まったこともあり、教団を離れることとなる。11年という短い期間ではあったが、ハントの英語伝道に関する影響は、*Vade Mecum* の内容などとともに、海外真宗寺院に未だ残り続けている。

(6) ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立 (釋 氏)

2. *Vade Mecum* の概観

ハントの功績に関して最も注目すべきは、初めての英語礼拝聖典である *Vade Mecum* (ラテン語 “go with me”, “必携”: 以下英語原文を筆者日本語訳) を刊行したことである。ハント夫妻はこの *Vade Mecum* を出版するに当たり、多くの儀礼次第やそれに使用する拝読文、讃仏歌⁴⁾ を創作し、これらは各教団の英語聖典に引用されている⁵⁾。本書には計5版の刊行が現在確認されているが、現在所有する3つの版(1版1924年, 3版1927年, 5版1932年)を研究対象として検証すると、1版は儀礼・讃仏歌・カテキズム, 3版・5版は儀礼・法句経・讃仏歌の各3部構成である。さて、*Vade Mecum* の儀礼形式や内容はプロテスタントのものを取り入れているようだが、ハントが若きころイギリスでプロテスタントの一派アングリカンの聖職者を志したことがその背景となっているのだろう⁶⁾。ここに海外真宗寺院に現存するプロテスタント的儀礼の要因が見られる。

3. *Vade Mecum* の儀礼の考察

3.1. 儀礼の使用言語について～プロテスタントと上座部仏教の影響～

拝読文の使用言語に関しては、プロテスタント(キリスト教)的な語句として、“St. Shinran (親鸞聖人)”, “His Holy Teaching (仏の教説)” 等がみられる。また5版でのハントの上座部仏教への傾倒が、“Kaundinya Shinkaku⁷⁾ (ハントの名前)” (1版で Ernest Hunt), “Atthangiko Maggo (八正道)” (1・3版で Noble Eightfold Path) 等のパーリ語使用に確認できる。

3.2. 儀礼内容に見るハントの信仰

① “Buddha (仏)” という語について

Vade Mecum の儀礼部分において、ハントは “The (Lord) Buddha (仏)” という言葉を “釈尊” として使用しており、“Amida (阿弥陀仏)” という語をほぼ使用しておらず、ハントの信仰対象が釈尊であったということが確認できる。

② “Eightfold Path (八正道)” と “Oneness (一如)” について

本書に “八正道” の拝読文は多くみうけられるが、“Oneness” という語との間にハントの上で深い関わりが見られる⁸⁾。具体的に言えば、“Oneness” が、私たち衆生が八正道の実践によって自覚できるものであると示している。

③ “Golden Chain (金の鎖)” と “Karma (業)” について

ハントが *Vade Mecum* で記した “Golden Chain” という拝読文は、海外寺院で

は子供時代から親しまれ大変人気があるが、その初出は3版（あるいは2版）に見える。作者は不明だが、現在数名の開教使が詩人の才能を持つドロシーではないかと述べている⁹⁾。しかし、ハントの著作に“Chain (鎖)”を用いた法話¹⁰⁾もあり、ハントの可能性があるとすることを提言したい。ここでハントが記したものと、現在拝読されている文¹¹⁾との相違を2点挙げる。まず“Lord Buddha”が“Amida”に変えられ、“knowing that on what I do now depends my happiness or misery. (自分の幸せや苦しみが何によって起こるかを知ります)”という文の削除が見られる。また現在は、「私は阿弥陀仏の全生命に広がる慈悲の中にいる。だから同じつながりにある他の生命に優しくしましょう。」と理解されている傾向にあるが、ハントの“Golden Chain”とは、「“Karma (業)”の教えに従い、“身口意の三業”を整えます。」という、釈尊に対しての誓いの文であったことがわかる。

4. ハントの与えた教学的影響と開教使の対応

Vade Mecum の儀礼に見る教学を概観したが、上座部に身を置いたハントの目指す仏教伝道とは、八正道の実践や、そのほかにも上座部の慈悲の瞑想、五戒・十戒の遵守なども重視し、釈尊への信仰を促したということが窺える。しかし、後にこれらの拝読文は各開教区に持ち込まれ引用され続け、ハントが“The (Lord) Buddha (釈尊)”としたいくつかの部分が、“Amida (阿弥陀)”と他開教使によって変換されることとなり、ハントが掲げた“釈尊を仰ぎ自業自得にたよる自力聖道門”と、“阿弥陀仏を仰ぎ本願力に全託する他力浄土門”とが、同じ礼拝聖典内で共存するという教学的矛盾が起こり、それが英語教学の大きな問題に発展していったと考えられる。さて、ハントの“プロテスタント化”され、“上座部化”された *Vade Mecum* という礼拝聖典は、当時の開教使や門信徒にいかに受け入れられていったのであろうか。20世紀初頭にハワイ、そしてアメリカ本土やカナダで宗教上主流だったのは“プロテスタント”であり、同化に抵抗がなかったのは、そこに当時、人種的・宗教的差別下にあった、日本人開教使や日系移民たちの歴史的必然性があったからではないだろうか。また日本での明治・大正時代における近代仏教の一つの流れとして、“超宗派化”“通仏教化”への動きも見られ、当時の開教総長や開教使が日本国内ではなかなか果たせなかったその理想を海外伝道の現場に持ち込んだことが、*Vade Mecum* の受容の一背景ではないかと考えられる¹²⁾。なお近年、キリスト教的拝読文は大幅に削除され、より真宗的な英語礼拝聖典の刊行が各開教区や寺院で行われていることを追記しておく。

(8) ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立 (釋 氏)

おわりに

本稿であきらかにしたのは、海外開教史の表舞台に出ることのない、ある欧州系僧侶と、彼が刊行した初めての英語礼拝聖典の存在であり、また彼が及ぼした英語教学への影響である。ハワイ教団 100 周年記念誌 *A Grateful Past, A Promising Future* (1989) には、1939 年ごろの状況を「日本語を話す年配の 2 世と、英語しかわからない若い 2 世の間との仏教理解のギャップは使用言語の問題だけが原因ではない。本当のギャップの原因は、英語しかわからない子供たちに対して日曜学校で幼いころより行われた、ハント師が築いた英語の通仏教教育にある¹³⁾。」と記している。このギャップは、私がいたカナダの開教現場でも感じたことで、そのブリッジはどの教団においても、まだ完全に作られてはいない。しかし開教使達は、日々ブリッジづくりに挑んでいるのである。

1) 1867-1932. 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』2001 年に今村に関する詳述がある。

2) 1876-1967. イギリス Hertford Hoddesdon 生まれ。英国商船隊時代、印度人仏教徒の家で業や輪廻の教えを聞き仏教に傾倒する。ハントに関しては、Ernest K. Shinkaku Hunt, *The Buddha and his teaching*, 1962; Louise H. Hunter, *Buddhism in Hawaii: Its impact on a yankee community*, 1971, pp.152-157; HHMH, *A Grateful Past, A Promising Future*, 1989, pp.57-66; Michihiro Ama, *Immigrants to the Pure Land*, 2011, pp.70-71 に詳述がある。

3) The Buddhist Brotherhood in America, *Buddhist Gathas and Ceremonies*, 1943, pp.64-65; Tetsudan Kashima, *Buddhism in America*, 1977, pp.56-57; 守屋『アメリカ仏教の誕生』125-126 頁。

4) ウェルズ恵子「民謡の比較文化研究—日系アメリカ人の俗謡を中心に」(立命館大学アート・リサーチ研究所活動報告 vol. 3, 2001 年) には讃仏歌に関する詳述がある。

5) BCA, *Young Buddhist Companion*, 1948; HHMH, *Praises of the Buddha*, 1949.

6) なおアングリカンの儀礼は、カトリックに類似しているという指摘がある。

7) Kaundinya は上座部僧名、Shinkaku は浄土真宗の法名。8) *Vade Mecum*, 5th, p.7; Hunt, *The Buddha and His Teaching*, 1962, p.111.

9) 1・3・5 版収録の讃仏歌 “Love every little thing” に類似した表現がある。

10) Hunt, *The Buddha and his teaching*, p.96, *The Long Chain of Lives*.

11) BCA, *Shin Buddhist Service Book*, 1994, p.15.

12) 森龍吉編『真宗史料集第 13 巻 真宗思想の近代化』1977 年 15 頁。

13) 76 頁。

〈キーワード〉 *Vade Mecum*, ハント, ハワイ開教区, 海外伝道, 英語教学

(龍谷大学大学院)